

4-1 温暖な気候を活かした園芸産地の育成(ばれいしょ)

【成果の要約】

- 1 経営分析を踏まえて個別に検討を行い、今年度の計画を策定し、経営改善に取り組んでいる。
- 2 ジャガイモシストセンチュウ対策の説明を行い、シストセンチュウの発生拡大と県内品種の抵抗性の問題が共有され、抵抗性品種「しまあかり」の導入が進められることが理解された。

1 対象

和泊町園芸振興会ばれいしょ部会 316 戸，知名町園芸振興会ばれいしょ部会 280 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) 農家数の減少は避けられないため、規模拡大に向けた農地及び労働力の確保，省力技術の導入を図り，大規模経営体を育成する。
- (2) 近年，栽培途中の茎葉と収穫後の塊茎に発生する腐敗性病害が問題となっている。腐敗性病害の実態把握と防除対策を検討し，地区内の平年単収の向上を図る。
- (3) 県内外のシストセンチュウ抵抗性品種の導入推進を図るため，現地適応性の確認，管理技術の組立を図る。

3 活動内容と成果

- (1) ばれいしょの生産性の向上

ア 大規模化志向農家の育成支援

大規模志向農家2戸に対して，病虫害等の栽培や経営管理について支援した。和泊町の農家と過去4年の経営分析をもとに所得向上のため単収向上や収入のない時期の作物導入を個別検討し，今年は所得向上に向けて有機物の投入など土作りに取り組んだ。また，知名町の1戸は，新規作物の栽培安定に向けた取り組みや従業員への給与支払いの試算等を行い，将来の法人化に向けて準備を進めた。

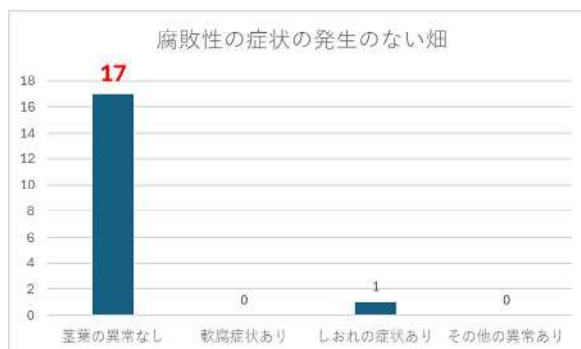
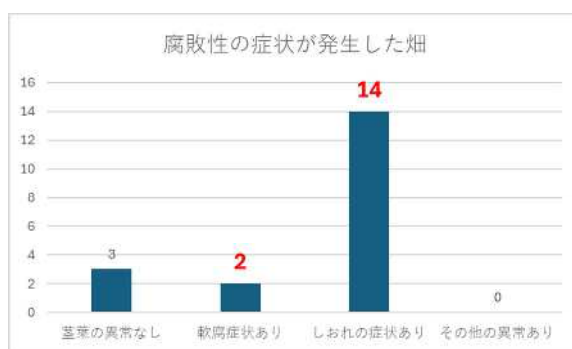
- (2) ばれいしょの単収向上

ア 腐敗性病害の実態把握

昨年のアンケート調査結果から，腐敗性いもの発生したほ場では，茎葉にしおれ症状等の異常がみられていたことがわかった。一方，今回の調査では有意な差は見られなかったが，腐敗性病害の予防には，種いも消毒や残渣の持ち出しは有効であると思われた。



腐敗性病害の調査



令和6年産ばれいしょアンケート

今年令和6年産ばれいしょについて132戸にアンケートを実施し、種いもの消毒は多くの方が実施していることがわかり、茎葉の消毒（疫病以外）と残渣の持ち出し実施の割合が少ないことがわかった。

イ 生産安定対策技術支援

ばれいしょの栽培講習会、LINE等を活用した病害虫対策の周知を行い、生産安定対策技術の向上に向けた支援を行った。

ウ シストセンチュウ抵抗性品種の現地への普及

実証ほ（県内産地産種いもの生産性実証、北海道種場産地産の種いもの11月植えでの適性把握）を設置している。しまあかりの発芽率は9割近くあり、生育は順調であった。今年新たに6,000kgのしまあかりの種いものが栽培され、また、和泊町の青年は栽培特性を把握するためのプロジェクトに取り組む等栽培が拡大した。昨年のしまあかりを栽培した農家の評価は良好で、今後も継続して普及啓発を行っていく。

農協の園芸振興会総会や知名町のばれいしょ出荷業者で、ジャガイモシストセンチュウ対策に関する説明を行い、シストセンチュウの発生拡大と県内品種の抵抗性の問題が共有され、抵抗性品種「しまあかり」の導入が進められることが理解された。普及だより等様々な機会を利用し普及に努めた。



発芽状況1ヵ月後（産地冷蔵）
左：ニシユタカ 右：しまあかり



発芽状況1ヵ月後（北海道）
左：ニシユタカ 右：しまあかり

4 今後の課題

- (1) 大規模化志向農家の育成
- (2) 疫学調査に基づく腐敗性病害の軽減対策の確立
- (3) しまあかりの栽培技術の向上と面積拡大

5 担当した普及職員（○印はチーフ）

○水迫， 下池， 折田

4-1 温暖な気候を活かした園芸産地の育成(野菜・果樹・GAP)

【成果の要約】

- 1 与論版さといも疫病対策 I P M防除体系の認知度は年々向上している。
- 2 さやいんげんの品種毎の栽培ポイントも含めて栽培暦を改訂した。
- 3 ニンニクのネダニ防除法について資料を配布し防除の意識が高まった。実証では種消毒と薬剤土壌混和による同時防除でネダニの発生を抑えることができた。
- 4 定期的な巡回と情報提供でえだまめの病虫害被害を抑えた。関係機関・団体とえだまめ栽培の課題の共有を行った。
- 5 マンゴー安定生産技術の理解が深まり、栽培技術向上への意識高揚が図られた。

1 対象

与論町野菜振興会さといも部会 104 戸，与論町野菜振興会いんげん部会 105 戸
和泊町園芸振興会にんにく部会 67 戸，知名町えだまめ生産組合 30 戸
沖永良部果樹生産組合 92 戸，与論町果樹振興会 257 戸
ヨロン希少フルーツ組合 5 戸
和泊町園芸振興会 339 戸，知名町園芸振興会 304 戸，与論町園芸振興会 171 戸

2 課題を取り上げた理由

- (1) さといもは、病害（疫病等）の発生や高齢化・労働力不足により、生産性が低下している。
- (2) さやいんげんは、天候不良等により品質や単収に年次間差があり、生産量が安定していない。また、土壌環境悪化等の連作障害により生産性が低下している。
- (3) にんにくやえだまめ等の新規振興品目の産地振興が必要である。
- (4) マンゴーは年次間の収量格差が課題で、品質向上と着果の安定対策が必要である。
- (5) 引き続き G A P への取組の推進により安心安全な農産物生産を図る必要がある。

3 活動内容と成果

(1) 野菜生産振興

ア さといも

疫病対策として、与論版さといも疫病対策 I P M 防除体系（残渣の簡易処理，種芋消毒，ドローン委託防除等）を推進し，体系の認知度は 78%（前年度 + 3%）に増加した。栽培研修会では，アンケート結果も踏まえて疫病 + 乾腐病の適期防除を指導した。

省力化体系として，施肥・畝立て・マルチ張り + 機械植え体系の実証と受託体制について検討した。

イ さやいんげん

過去の実証結果も踏まえ，品種毎の特性に応じた栽培を指導し，栽培暦の改訂を行った。セグロウリミバエの被害が懸念されたため，にがうりと合同で防除研修会を行い，室内研修と併せて現地でのハウスやトンネルの防虫ネット使用のポイントについて指導した。



さといも栽培研修会



セグロウリミバエ防除研修

ウ にんにく

出荷反省会、栽培講習会にてネダニの防除法についてまとめた資料を配布し、生産者へ防除法の周知を行った。昨年ネダニが発生した農家は植付前に薬剤の土壌混和を行うなど、防除の意識が高まっている。また、薬剤処理によるネダニ防除の実証結果により、種消毒と薬剤の土壌混和を組み合わせ、他害虫と同時防除を行うことで、ネダニの初期発生を抑えることができた。



にんにく出荷反省会

エ えだまめ

病害虫の発生状況について生産組合のLINEグループ内で適宜情報提供を行った。また、栽培講習会や現地検討会では発生が多い病害虫の防除方法について情報提供を行い、早期防除につながった。

町・JAとえだまめの振興方針に関する打合せを行い、生産拡大のための単収向上や栽培方法の整理など、えだまめ栽培における課題と今後の活動方針に関して情報共有を行った。



えだまめ現地検討会

(2) 果樹生産支援

各町及び農業開発総合センターと連携のもと、マンゴー、タンカンの栽培技術研修会や個別巡回による技術支援を行った。マンゴーについては、本年度、春先の低温により着果が安定しなかったが、次年度に向けて栽培管理技術（剪定 水・温度管理）を中心とした指導を重点的に実施し、生産安定技術の向上に努めた。



マンゴー栽培技術研修会

(3) 安心・安全な農産物の生産

講習会で病害虫管理や収穫・調整管理等の取り組みについて説明した。新規就農者基礎講座で、新規就農者10名にGAPに取り組む必要性について説明し、概ね理解を得られた。施設栽培にがうり2戸、さやいんげん6戸、さといも2戸の施肥設計を可給態窒素も含めて関係機関と連携して行い、分析結果に応じた土づくり・適正施肥を実施した。

4 今後の課題

(1) 野菜生産振興

- ア さといも：病害（疫病・乾腐病）被害軽減による生産性向上
- イ さやいんげん：品種特性を生かした栽培方法の普及
- ウ ニンニク：病害虫（ネダニ、葉枯病）の防除による生産性向上
- エ えだまめ：研修会等による基礎的な栽培技術の普及

(2) 適正着果，着果率向上，適正防除による安定生産（品質，収量，年次間の結果安定）

(3) GAPの取組の継続した推進による安心・安全な農産物の生産。

5 担当した普及職員（○印はチーフ）

○水迫陽子，折田高晃，満吉俊也，下池優希